報告Ⅰ　「大谷探検隊の目指したこと」

報告者：入澤　崇（龍谷大学文学部教授・龍谷ミュージアム副館長）

入澤:　只今より、龍谷大学アジア仏教文化研究センターとの共催で、日本印度仏教学会第 62 回学術大会パネル発表 E「大谷探検隊をめぐる新研究」を開催させていただきます。

私はコーディネーターを務めます龍谷大学の入澤です。本日は大谷探検隊に関連しまして、仏教学、言語学、東洋史学、そして美術史の立場から現在の研究状況を発表いたします。

先ず、私が最初に口火を切り、本パネルの導入とさせていただきます。

大谷探検隊、世上知られております大谷探検隊はレジュメの 1 に挙げましたように、第 1 次、第 2 次、第 3 次と行なわれ、そこに挙げているものが一般に流布しておる大谷探検隊であります。時代は 20 世紀初頭、レジュメの 2 に示した通り、ユーラシア大陸の中央部に世界の関心が集まっている時です。列強諸国が内陸アジアに探検隊を繰り出しました。そしてその中で、非常に異色な調査隊、これが日本の大谷探検隊です。当時の列強諸国の探検隊、これは国がバックに付いておりますけれども、大谷探検隊だけは日本政府が支援をしたというのではなくて、西本願寺の一事業として始まったものです。1902 年に大谷探検隊は始動いたします。これまで大谷探検隊といえば、シルクロードのイメージがあまりにも強いのですが、当初は仏教の源流であるインドに主眼が置かれておりました。

レジュメの 3 をご覧ください。これが第一次大谷探検隊の全メンバーです。中国新疆に入ったのが、よく知られております渡辺哲信、堀賢雄。そしてインド調査隊は総勢 11 名の隊員で編成されました。さらに、遅れて応援部隊が日本からインドに駆け付けようとしたところ、ビルマに上陸せよという命令が大谷光瑞師から下って、ビルマ・中国へ入った人達がおります。このように、第一次大谷探検隊はインド、中国・新疆、ビルマ、中国南西部とかなり広域にわたる調査であったことがわかります。

この第一次大谷探検隊におけるキーパーソンは大谷光瑞師の後見人とも言うべき藤井宣正です（レジュメ４）。大谷光瑞師がロンドンに留学をする。その時に父親の大谷光尊師が付けた後見人、これが藤井宣正でありました。この龍谷大学の前身であります文学寮の教授であった藤井宣正。彼は美術・考古にも大変造詣の深い仏教学者でありました。彼は探検隊に加わる前から腸に疾患を抱えておりまして、このインド調査が終った後、フランスのマルセイユで亡くなります。彼が詳細な調査報告書を記しておったのですが、これは今に至るも見

つかっておりません。この藤井宣正がインド調査の後半、東インド、南インドの仏跡調査をした時に、藤井に同行をしたのが若き姉崎正治であります。姉崎正治、これはもう仏教研究で言えば、『根本仏教』、それから『現身仏と法身仏』の著作もあることから、我々仏教研究者にとっても身近な存在でありますし、この姉崎こそが日本における宗教学研究の基礎を作られた方であることはご承知かと思います。

その姉崎正治が、藤井と調査を同行したという縁で、藤井が亡くなった後、追悼文を書いております。レジュメの４に追悼文の一部を掲げておきました。この追悼文から、カルカッタ（現コルカタ）のインド博物館で藤井宣正が実に丹念に仏像や菩薩像の類を調査していたかということがわかります。現在、仏教研究の中で、藤井宣正という名前は全く出てくることはありません。しかし、この藤井宣正は当時の仏教研究に多大な貢献をなした人物であります。たとえば『佛教小史』、これこそがインドから始まる仏教の歴史、インド、中国、日本の仏教通史を書いた最初の書物であります。それから『現存日本大蔵経冠字目録』、これはフランスを代表する東洋学者シャバンヌが愛用していた目録です。それから、遺稿集として『愛楳全集』があります。そしてこの藤井宣正はわが国最初の仏教学の仏教辞典である『佛教辞林』を作りました。この辞書は、藤井が亡くなった後、インド調査で藤井のアシスタントを勤めた島地大等、そして南条文雄の協力を得て発刊されました。この藤井宣正の教え子が、第一次大谷探検隊で中央アジアを探索した渡辺哲信であり、堀賢雄でありました。この藤井宣正のことは長らく知られていなかったわけですけれども、ひょんなところから彼の偉業が確認されました。それは、島崎藤村研究グループが、この藤井宣正が書き残した『印度霊穴日記』、これを翻刻して発表したことがきっかけでした。1980 年代でしたか、島崎藤村研究グループが『島崎藤村研究』という雑誌を発行しておりまして、その中で三井文彦さんという方が長野の真宗寺に眠っていた藤井宣正の日記を毎号連載いたしました。この連載記事はその後まとめられ、真宗寺から『印度霊穴日記』として出版されました。この日記の存在は、大谷探検隊のインド調査を解明する重要な手がかりとなりました。藤井の急死により正式の調査報告書は出ていません。しかし、藤井の日記と他の隊員、例えば上原芳太郎や薗田宗恵といった他の隊員達の日記をつき合せますと、インドにおいて大谷探検隊がどういう調査を行なったかということがだいたいわかります。

さて、どうして島崎藤村研究グループが藤井の日記を見出したかと申しますと、亡くなった藤井宣正、彼をモデルにして、島崎藤村が『椰子の葉蔭』という小説を書いたからであります。長野の真宗寺、ここは藤井宣正の奥さんの里であり、藤井は奥さんに絵ハガキをインドから出していました。真宗寺の住職から藤井の絵ハガキを見せられた島崎藤村は藤井をモデルにして、書簡体の小

説を書いたというわけです。その真宗寺に眠っていた藤井の日記を読めば、大谷探検隊がインドで何を目指していたかが実によくわかります。インド調査の主たる目的、これはアショーカ王の事蹟、それから石窟寺院の調査、大きく分けますと、この2点が主たるものであったということが、この藤井の日記から明らかとなります。

大谷探検隊の調査範囲は広大です。大谷探検隊の第一次の調査でビルマ・中国の調査をした連中と伊東忠太が遭遇をしております。その伊東忠太の日記を読みますと、レジュメの５でありますが、光瑞新法主の考えていることがいかに雄大なものであったか、それに対して、自分はいかに姑息なことを考えているかというようなことが書かれています。伊東忠太は、法隆寺の柱の源流がギリシアのエンタシスにあることを立証すべく、中国から西へ、トルコ、ギリシアを目指していたわけです。中国で雲崗石窟を確認した、意気軒昂としていた伊東忠太ではありましたけれども、大谷探検隊の構想というものを聞かされるに及んで、いかに自分が小さいことを考えていたかということを知らされ、打ちのめされる。この大谷探検隊との接触が、後に伊藤忠太が東京で築地本願寺、そして京都・西本願寺の東にあります伝道院（旧真宗信徒生命保険社屋）を設計することに繋がっていくわけです。

西域で大谷探検隊の意図したこと、これにつきましては、その雄大な構想というものを光瑞師自身が語っております。それは、大谷探検隊の資料集成とも言うべき『西域考古図譜』の序文に記されておりまして、四つの目的が挙げられています。一つ目は、仏教伝来の経路と仏教遺跡の調査をすること。二つ目はイスラムによって仏教が被った圧迫の状況を調べること。この時代、イスラムに対して関心を持っていたということ、これは注目すべきであろうと思います。それから三つ目は仏教遺跡に残っている経典・仏像・仏具などの収集、そして最後に中央アジアの地理・地質・気象の調査、この4点が大谷光瑞師自身の言葉で大谷探検隊の目的として語られております。

大谷探検隊による調査は1914年、突然打ち切られるわけでありますが、大谷探検隊のもたらしたもの、これは神戸岡本の二楽荘、大谷光瑞氏の別邸でありますが、ここに集められておりました（レジュメ６）。その二楽荘から学術雑誌が発刊されました。これが『二楽叢書』です。ここで中心となったのは橘瑞超です。橘瑞超は第二次、第三次探検隊で中央アジアを探索した人物です。この方はわが国最初のウイグル語研究者でもありますし、同時に仏教を中心とした教育に専心された方でもあります。この二楽荘には武庫中学が併設されておりまして、初代校長が橘瑞超でした。二楽荘では大谷探検隊が持ち帰った文物の展示も行われました。大きく新聞報道もされまして、これはわが国最初の本格

的な西域文化展であろうかと思います。1914 年、大谷光瑞師が門主を辞任されます。そのあたりから、大谷探検隊のもたらした文物が流転の悲劇に見舞われます。二楽荘も実業家、久原房之助の手に渡り、そして大谷コレクションは中国、韓国、日本の三国に分散されてしまい、今もって、この大谷探検隊将来品の全貌というものはまだ捉えられてはおりません（レジュメ７）。その全貌を捉えるべく、龍谷大学の西域研究会は今、研究を進めているところでございます。

ここで大谷光瑞師に焦点を当ててみたいと思います。光瑞師が将来品の中で最後まで手放さなかったもの、これが仏教写本です（レジュメ８）。光瑞師は門主を辞任した後も、中国・旅順にありました別邸で、仏教写本の研究を続けられました。このときも橘瑞超が中心となっておりました。光瑞師は漢訳仏典のみならず、サンスクリット原典の収集にも力を注がれました。1919 年には光寿会という原典の翻訳研究組織が結成されます。ここでロシアのミノロフ（Nikolaï D. Mironov）を雇いまして、サンスクリット写本の研究をしております。

また大谷光瑞師には知られざる一面がございまして、たいへん地理学に造詣の深かった方であります（レジュメ９）。光瑞師と地理学との接点、それは中国にあります。1899 年の中国、当時の清朝でありますが、光瑞師が清国に巡遊をされた時、5 カ月かけて中国国内を視察いたします。その折にレポートを作成いたしまして、それをイギリス王立地理学協会へ送付いたします。それが非常に価値の高いものであるということで、光瑞師はアジア人として初めて王立地理学協会の会員に推挙されました。ロンドンへ留学してから、地理学の専門家とも親交を交わし、ロンドンでは小川琢治とも親交を結んでおります。この小川琢治は京都大学の最初の地理学教室の教授になる方でありまして、湯川秀樹博士のお父様であります。20 世紀初頭、王立地理学協会でシルクロード熱が沸き上がっておりました。その真っ只中にいたのが、この大谷光瑞師および光瑞師を取り巻く若きメンバー達であったわけです。

光瑞師が構想していたのは、仏教者としての世界認識でありまして、これは光瑞師の書かれたものの中から導き出すこともできるわけですけれども、特に地誌という発想、これに重点を置いておりました。第一次の大谷探検隊以降、光瑞師自身があと 4 回ほどインドを訪れておりまして、『印度地誌』という書物を 1942 年に刊行しております。大谷探検隊に関して、彼らの正式な調査報告書が出なかったものですから、なかなか全貌を知ることはできません。しかし若きメンバーにも、光瑞師の地誌を重視するという発想が伝わっておりました。第一次探検隊のメンバー、渡辺哲信と堀賢雄、彼らは清朝の考証学者である徐松の『西域水道記』を読んでおりました。ふたりはこの書物に基づいて西域の調査をしております。それから、第三次の調査の折、橘瑞超はタクラマカン沙漠を縦断しますが、彼は何も冒険をしようとして沙漠地帯に入ったわけではな

くて、極度に乾燥した地帯がいかなるものかということを身をもって実証しようとしたのであります。この橘の沙漠縦断については今もロンドンの王立地理学協会で知られております。橘が作成し提出したスケッチマップは、王立地理学協会に現在も残っております。彼らが、いかに実証的に研究をしようとしていたかがわかります。ところが残念ながら、正確な報告書は出ないまま、調査は終結したのです。

そこで、私達が大谷探検隊に関する総合的な研究に、今取り組んでいるところでございます。大きく分けて三つのセクションを設けました（レジュメ 10）。収集品の調査・研究。収集品、文献資料、美術考古資料、そして遺跡の調査・研究が二つ目。そして、探検隊そのものの研究、これが三つ目であります。

龍谷大学では西域に関しまして、21 世紀になりまして、次々と新しいプロジェクトが始まりました。レジュメの 11 に書いている通りでございます。本日はこれから、先ず収集品の調査・研究グループから 3 名の先生方に写本研究の最前線をご報告いただきます。そして、遺跡の調査ということで、モンゴル調査をしておられます村岡先生から、モンゴルのエルデニ・ゾーのことをお話しいただきます。そして、我々の中で一番遅れている美術に関する研究、これについて宮治先生から報告をしていただくことになっております。

本パネルの導入としての私からの発表は以上です。ありがとうございました。

大谷探検隊の目指したこと

入澤　崇(龍谷大学)

１）一般に知られている大谷探検隊

第１次　1902－1904 大谷光瑞　渡辺哲信　堀賢雄　本多恵隆　井上弘円
第２次　1908－1909 橘　瑞超　野村栄三郎
第３次　1910－1914 橘　瑞超　吉川小一郎

２）内陸探検の時代

西域探検一覧

ロシア	ブルジェワルスキー	1870－73，1876－77
		1879－80，1883－85
	クレメンツ	1898
	コズロフ	1899－1901，1907－1909,
		1923－1926
	オルデンブルグ	1909－1910，1914－1915
スウェーデン	ヘディン	1893－1897，1899－1901
		1906－1908
フィンランド	マンネルヘイム	1906－1908
イギリス	スタイン	1900－1901，1906－1908
		1913－1916
フランス	ペリオ	1906－1909
ドイツ	グリュンウェーデル	1902－1903，1905－1907
	ル・コック	1904－1905，1913－1914

３）第１次大谷探検隊

中国新疆	渡辺哲信	堀　賢雄	
インド	大谷光瑞	本多恵隆	井上弘円
	藤井宣正	日野尊宝	薗田宗恵
	上原芳太郎	升巴陸龍	島地大等
	秋山祐顕	清水黙爾	
ビルマ・中国	渡辺哲乗	吉見円蔵	前田徳水
	野村礼譲	茂野純一	

４）ロンドンにおける光瑞の後見人・藤井宣正

美術･考古にも造詣が深い仏教学者。第一次大谷探検隊の実質上のリーダー。腸に疾患をかかえながらインド調査を決行し多大な成果をあげたが、1903 年 6 月 6 日フランスのマルセイユで亡くなる。彼の記した調査報告書は紛失したまま見つかっていない。藤井を敬愛する宗教学者の姉崎正治が藤井のインド調査に一部同行した。いまの仏教学研究の中で藤井宣正の名が出ることはほとんどない。

☆藤井に対する姉崎正治の追悼文（『愛楳全集』）

「…カルカッタの蒸気のような空気の中で、南に面して閉じきりの博物館の陳列室で働く事は、無上の苦痛である、…自分は耐えかねて、昼飯の前に博物館を辞して家に帰って午睡を貪ったが、藤井君は 4 時閉館までは毎日必ず詰め切りであった。しかも多くの仏像の陳列台は、4 尺ばかりの高さであるから、仏像の形相を吟味するために、病める腸を持ちながら、中腰になって数時間、熱さの中で勉強してくる。健康のためによくないといっても何でも、中々きき入れない。自分もそれで励まされて、午睡を貪るばかりが能ではないと思った事もあるが、どうしても藤井君の真似は出来なかった。それのみならず、大抵の人は夕飯の後は、休んで夕風に涼むのに、藤井君は燈下蚊に攻められながらも、常に書見する、材料を整える。北から帰ってきた大等（＝島地大等）君を督して研究をする。その間自分はウィスキーのソーダ水を飲みながら、横合いから雑談をして日を送った」

☆藤井宣正の著書

『佛教小史』（1894）、『現存日本大蔵経冠字目録』（1898）

『愛楳全集』（1906）、『佛教辞林』（1912）

☆島崎藤村研究グループが見出した大谷探検隊の真実

藤井宣正・三井文彦校注『印度霊穴探見日記』（真宗寺）1977

インド調査の主目的：アショーカ王の事蹟（特に碑文）、石窟寺院の調査

５）大谷探検隊の雄大なる構想

貴州省揚松で伊東忠太が大谷探検隊と遭遇する。

「・・・私は両氏（野村礼譲と茂野純一）に就いて雲南緬甸の事情を聞き、両氏は私に湖南湖北の状況を問ひ、互いに少なからぬ便益を得たが、私は光瑞新法主の雄図を両氏より詳かに伝聞して感興禁じ難く、つくづく今自分の試みつつある旅行の姑息にして小規模なるを恨んだ。・・・」（伊東忠太「支那旅行

談」『伊東忠太著作集　第5巻　見学・紀行』310頁）

☆大谷探検隊の目的
①仏教伝来の経路と仏教遺跡の調査
②イスラームによって仏教が被った圧迫の状況の調査
③仏教遺跡に残る経典・仏像・仏具などの収集
④中央アジアの地理・地質・気象の調査

『西域考古図譜』序文（大谷光瑞）

6）研究・教育の拠点としての二楽荘
二楽叢書：わが国における西域学の原点
わが国最初のウイグル語研究者は橘瑞超
武庫中学を併設（初代校長は橘瑞超）
わが国最初の本格的な西域文化展

7）門主辞任
実業家久原房之助の手に渡った二楽荘
流転する大谷コレクション（三カ国に分散）
日本：東京国立博物館・龍谷大学など
中国：旅順博物館・北京国家図書館
韓国：韓国国立中央博物館

8）仏教研究者としての大谷光瑞
最後まで手放さなかった仏教写本　旅順別邸で研究（橘瑞超が中心）
光寿会結成（1919年）：サンスクリット写本研究
原典志向（漢訳中心の仏教界）

9）地理学者としての大谷光瑞
発端は1899（明治32）年の清国巡遊
1月から5月にかけて中国を視察→レポートをイギリス王立地理学協会へ送付→アジア人として初の王立地理学協会の会員に推挙される→ロンドンでの小川琢治（地理学者、湯川秀樹の父）との親交→王立地理学協会で湧き上がる西域熱→光瑞の頭のなかにあったのは仏教者としての世界認識
大谷光瑞『印度地誌』（有光社）1942

☆地誌という発想・実証という手法
徐松『西域水道記』を検証した渡辺哲信・堀賢雄

タクラマカン沙漠を縦断した橘瑞超

10）大谷探検隊に関する総合的研究
収集品の調査・研究
　文献資料（仏典写本、文書）
　美術考古資料
遺跡の調査・研究
　仏教遺跡及び仏教伝来ルート
探検隊そのものの研究
　隊員の日記、書簡類

11）龍谷大学における西域文化研究の新局面
2002 年より旅順博物館との共同研究開始
2004 年より国際敦煌プロジェクト（IDP）日本支部として活動開始
2004 年より仏教西漸に関わる調査開始
2009 年より大谷探検隊モンゴル調査の検証開始
2010 年よりアジア仏教文化研究センター（ユニット 2 中央アジア地域班）始動
2011 年龍谷ミュージアム開館